

必携
故事ことわざ
辞典

三省堂編修所編

必携
故事ことわざ
辞典

三省堂

1979 年 5 月 1 日 発行



必携故事ことわざ辞典

定価 七五〇円

一九八六年二月一〇日 第二二刷発行

編者 三省堂編修所

発行者 株式会社 三省堂 代表者 上野久徳

印刷者 三省堂印刷株式会社

発行所 株式会社 三省堂

〒二二 東京都千代田区三崎町二丁目二十二番十四号

電話 編集 (〇三) 二三〇九四二

販売 (〇三) 二三〇九四三

総務 (〇三) 二三〇九五二

振替口座 東京 六一四三三〇〇

<必携故事・448 pp.>

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-385-13232-1

前書き

新聞や雑誌、あるいは日常の会話の中に、故事やことわざはしばしば引用されます。それは、いずれも言葉としての長い歴史を持ち、複雑な内容をきわめて簡明に、しかも力強く表現する働きを備えているからです。

例えば、「矛盾」^{むじゆん}「蛇足」^{だそく}「背水の陣」などは、古典に由来のある故事であり、「急がば回れ」^{つえ}「転ばぬ先の杖」^{つえ}「油断大敵」などは、古くから言いならわされてきたことわざであり、共に私達の語彙を豊かにし、処世上の知恵や教訓を示してくれます。

この辞典は、日常の会話や文章に使われているばかりでなく、大学入試や入社試験などにも、しばしば出題される「故事・成語」と「ことわざ・格言」を精選して五十音順に収録し、わかりやすく解説したものです。「故事・成語」は中国の古典に基づくものが多いので、特に出典を明記し、**原文**を書き下し文で掲げて、その語句のいわれも同時に知ることができるようにし、更に平易な解釈も添えました。また、これらの語句は意味を知ってい

るといっただけではなく、適切に使うところに大きな意義があります。そこで、**用例** **用法**を設け、実際に使われる場面や、定まった語句のつながりを示しました。なお、誤った読み方・書き方がなされやすいものについては、特に**注意**を添えました。

本書は辞典ではありませんが、普通の辞典とは異なり、必要な語句を調べ出すだけのものではなく、随意にあちこちを繙ひもといて読むことによって、よい語句を吸収し、利用していただくことを意図して編集したものです。

本書の編集にあたっては、原田種成先生はらだたねしげ（大東文化大学教授・文学博士）に、原稿作成から校正の細部にわたるまで、一貫して御尽力いただきました。厚く御礼申し上げます。なお、舞田正達先生まいだまさとお（大東文化大学・国際商科大学講師）の御協力をもいただきました。あわせて御礼申し上げます。

昭和五十四年四月

三省堂編修所

故事の背景

故事には「背水の陣」や「四面楚歌」のように、有名な歴史上の話が由来になったものがあるが、中には「蛇足」「漁父の利」のような作り話に基づくものがある。

「蛇足」は、昔、楚の国で褒美に酒を貰った家来たちが、一人で飲めば十分だが数人で飲むには足りないのので、酒を賭にして蛇を早く書き上げる競争をし、早くできた一人が調子に乗って不必要な足までも書き加えたために、足があつては蛇ではないと言われて、酒を貰いそこなつたという話である。

どうして、こんなつまらない話が有名な故事となり、今でも使われているのかと不思議に思うであろうが、それには大きな理由がある。

中国の戦国時代(前四〇三―前二二一)、中国本土が七つの大国に分かれて戦争がうち続いていた時、軍事はも

ちろんのこと、外交ということも重要な役割を果たしていた。いわゆる「樽俎折衝」の間に一国の運命が決められた例も少なくない。弁舌だけで諸国を説いてまわり、舌先の力で戦争を始めたりやめさせたりした、蘇秦とか張儀とかいう人々が出て来たのはこの頃である。蘇秦が「鶏口となるとも牛後となるなかれ」という卑近なたとえ話で諸侯を説き勧め、強大な秦に対抗する六国の軍事同盟を結ばせたことは有名な話である。このように、自分の意見を相手にわからせるには、ただ正面から難しい理屈を並べるだけでは効果がない。上手なたとえ話を使って説得すれば相手も納得し、敵も味方にする事ができるのである。

「蛇足」は、戦国時代の話で、楚の国の昭陽という将軍が、魏の国を攻める命令を受け、大勝利の末、魏の都まで攻め入って降服させた。昭陽将軍は大得意になり、自分の強さを示そうとして、さらにその東の斉の国までも攻撃しようとした。そのうわさを聞いて斉の国では大騒

ぎとなり、何とかしてその侵略を阻止しようとした。その時、陳軫ちんしんという者が昭陽に面会して「蛇足」のたとえ話をし、「あなたは魏の国を降服させて大手柄を立て最高の爵位をもらいました。この上、斉の国に勝っても、もはやもう爵位はなく、場合によってはせつかく得た爵位も人のものになる恐れがあります。それは蛇足と同じことではありませんか」と言った。昭陽將軍はその話を聞いて、なるほどもっともなことであると考へ、斉の国を攻めることをやめて引き返した。つまり「蛇足」の話によつて、斉は敵軍の侵略をばみ、一國を戦争の惨禍かんかから救うことができたわけである。

「漁父の利」は、どぶ貝が川辺で口をあけてひなたぼっこをしていると、鰯いわしがその肉をついばんだ。すると、どぶ貝は殻からを閉じて鰯のくちばしをはさんだ。互いに離さず頑張がんばっているうちに漁師が見つけて両方とも捕らえてしまったという話である。

これもやはり戦国時代のこと、趙ちようの国が燕えんの国を攻

めようとした。燕では戦争になつては大変と、蘇秦そしんの弟の蘇代そだいを趙につかわした。蘇代は趙王に会つて、鰯とどぶ貝のたとえ話をし、「今、趙では燕を攻めようとしていますが、燕と趙との両大国が戦争をして持久戦を続け国力を弱めたら、あの強い秦しんが漁父となつてやすやすと兩國を取ってしまうことになりはしないでしょうか」と言った。その話を聞いて趙王は燕に戦争をししかけることをやめた。「漁父の利」のたとえ話によつて燕は趙との戦いを未然に防ぐことができたのである。

かれらは相手を説得するために、まさに命がけで弁舌をふるつたのである。これを、ただ「戦争は人道に反する行為である」とか、「無益な戦争はやめるべきである」などという議論を展開し、真正面から百万言を費やして説得してみたところで効果はない。わかりやすい卑近なたとえ話が相手になるほどと納得させるのである。

そして、これらのたとえ話は時代の波に洗われながら今日まで残り、故事として利用されているのである。

あ

合縁奇縁あひえんきえん

縁というものは不思議なもので、人と人との気持ちがあうまく合うのも合わないのも、みな仏教でいう因縁によるものである。友人や男女の間などで、深い親しみを感じる場合にいう。

【類句】縁は異なもの

愛多ければ憎しみ至るあいおほくばにくしみいたる — 亢倉子・用道

人からかわいがられることが多ければ、必ず他の人から憎まれるようになる。特別な寵愛は身の破滅を招くことになるから注意しなければならぬ。

【原文】「恩甚だしければ則ち怨生じ、愛多ければ則ち憎しみ生ず〔過度の恩愛は人の憎しみを買うものになる〕」

挨拶は時の氏神あいさつときうじがみ

「挨拶」は仲裁の意。↓仲裁は時の氏神

愛してその悪を知るあいしそのあくを — 礼記・曲礼上

いくら愛しても、その人の悪い点をよく知る。他人の長所・短所も冷静によく認めるべきであるという意。

【原文】「賢者は狎れてしかも之を敬し、畏れてしかも之を愛し、愛してしかも其の悪を知り、憎んでしかも其の善を知る」

相手変われど主変わらぬあいてかかぬし

相手は次々と変わっても、それに対するこちらはいつも変わらず、同じことを何度も繰り返していることをいう。

愛別離苦あいべつりく

親子・兄弟・夫婦など、愛する人と生別・死別するようになる

る苦しみ。↓四苦八苦

【注意】普通は「あいべつりく」と区切つて読まれるが、正しい区切り方は「あいべつりく」である。

会うは別れの始め

始めがあれば終わりがあるのと同じように、会えば必ず別れがある。親子・兄弟・夫婦とていずれは死ぬ運命にあり、結局は、出会いが別れの始まりとなる。仏教でいう「会者定離」の意。

仰いで天に愧じず — 孟子・尽心上

自分自身に少しもやましいところがなく、きわめて公明正大である。

【原文】「仰いで天に愧じず、俯して人に忤じず」〔上の方を見ても天の神に恥じるところなく、下の方を見ても人々に恥じるところがない〕

【類句】俯仰天地に愧じず

青い鳥

幸福はあこがれるような遠い所にあるのではなく、気付かない身近な所にあるという意。メーテルリンク作の童話劇に登場する、チルチル・ミチル兄妹が幸福の象徴である青い鳥を捜し回ったが、結局わが家に飼っていた鳥が、求めていた青い鳥であることに気がついたという物語による。

青菜に塩

元気がなくてしょんぼりしているたとえ。青菜に塩をふりかければしおれるからいう。

青は藍より出でて藍よりも青し — 荀子・勸学

教えを受けた弟子が先生よりもすぐれた人になるたとえ。青色の染料は藍という草の葉から取ったものであるが、もとの藍の葉よりも美しい色をしている、という意。

【原文】「学は以て已むべからず。青は之を藍より取りて藍よりも青し、冰は水之を為して水よりも寒し〔学問はやめてはならない。青色は藍草の葉から採ったものだが、藍よりも青い、氷は水が作ったものだが、水より冷たい〕」

【参考】現在通行の『荀子』の原文は「藍より取りて」だが、古い本には「出_ニ於藍_一（藍より出でて）」とあるものもあり、「出藍の誉れ」という語はこれに基づく。

空き樽は音が高い

よくしやべる人には考えの浅い人が多いたとえ。中味のないからっぽの樽をたたくと高い音をたてるからいう。

【類句】浅瀬に仇浪

商いは牛の涎

商売をするには牛の涎のようでなければならぬ。一時に大もうけしようとせず、細く長く、わずかな利益を積み重ねて財をなすべきだ、という意。

商いは草の種

商売には種類が多いことのたとえ。

秋茄子嫁に食わすな

秋茄子はおいしいので、しゅうとめが嫁に食べさせたがらないという意。また、食べると体を冷やすので、また、秋茄子は種が少ないので子供ができないという縁起をかついで、嫁に食べさせなかったともいう。

秋の扇——文選・班婕妤の詩、怨歌行

愛情が薄らいで捨てられた女のたとえ。夏の間、大切にされた扇も、涼しい秋がくると片付けられて顧みられなくなる意。

【原文】前漢の武帝に愛された班婕妤（婕妤は女官の名）が、後に帝に愛されなくなった時、「裁ちて合歡の扇と為す、……常に恐る、秋節の至り、……篋笥（篋も笥も箱のこ

と」の中に棄捐せられ、恩情、中道に絶えんことを」と、わが身を不用になつた秋の扇にたとえたことによる。

秋の鹿は笛に寄る

鹿は、秋になると雌雄慕いあう習性があるので、たやすく鹿笛に誘われて近寄ってくる。弱点に付け込まれて利用されやすいこと、また恋の為に身を滅ぼすことにいう。

秋の日は釣瓶落とし

秋の入り日は、釣瓶を井戸の中に落とすように速く沈む。秋の日の暮れやすいことをたとえていう。

類句 秋の日の鈍落とし

商人は損していつか倉が建つ

商人はいつも損している損していると言いながら、いつのまにか倉を建てる。もうけていることを皮肉に言った言葉。

類句 商人は損と元値で暮らす

悪事千里を走る — 北夢瑣言・六 —

（人の善行は容易に世に知れないが）悪い行いやよくない評判は、いくら隠してもすぐ遠くまで知れ渡る。

原文 「好事門を出でず、悪事千里を行く」

参考 III news travels fast. 「悪いニュースは速く伝わる」

悪女の深情け

醜い女は美しい女に比して、愛情が強く嫉妬心が深い。転じて、ありがた迷惑である、という意に用いる。近ごろは「悪女」を心の悪い女の意に用いているが、本来は醜い女をいう。

悪銭身につかず

不正な手段で得た金は、つまらないことに使ってしまう

からすぐなくなる。

【類句】あぶく銭は身につかない

悪に強ければ善にも強し

悪いことをする力の強い人は、善いことをする力も強い。大悪人はいったん改心すると、非常な善事をなすことができるの意。

浅い川も深く渡れ

浅い川だからといって油断すると危ない。浅い川でも深い川と同じように用心して渡らなければならない。油断を戒めた言葉。

朝起きは三文の徳 ↓早起きは三文の徳

朝顔の花一時

「朝顔」の花は、むくげ（槿花）のこと。 ↓槿花一日の栄

浅瀬に仇浪

川の浅瀬には波が立ち、深いところには波が立たない。考えの浅い者ほど、口数多く騒ぎ立てるという意。

【類句】空き樽は音が高い

朝題目に夕念仏

朝は日蓮宗の題目の「南無妙法蓮華經」を唱え、夕方は念仏宗の念仏の「南無阿弥陀仏」を唱える。定見のないたとえ。

糾える縄の如し ↓禍福は糾える縄の如し

麻の中の蓬——（荀子・勸学）

麻はまっすぐに伸びるから、曲がりやすい蓬もその中に生えれば、自然にまっすぐ伸びるようになる。善良な友人と交われば、その感化で自然に善人になる、という意。

↓蓬麻中に生ずれば扶けずして直し
よもぎまぢゅうしやう

朝に紅顔あつて夕べに白骨となる
あしたこうがん　ゆうべ　はつこつ

世の中は無常で、人の生死が予測できないことをいう。朝、元気で若々しい顔をしていた人が夕方には急死して、火葬にされて白骨になってしまふようなことがある。

朝に道を聞かば夕べに死すとも可なり
あしたみち　き　ゆうべ　し　か

— 人論語・里仁 —
うんわ　りじん

朝、道理を聞いて悟ることができたら、その晩に死んでもかまわない。人の道のいかに尊いかを説いたもの。一説に、天下に道が行われ、社会の秩序が回復したと聞きさえしたら、死んでもよい、と解釈する。

朝に夕べを謀らず — 左伝・昭公元年 —
あしたゆうべ　はか　さだんしやうこう

朝には夕刻のことを考えない。長い先のことは考えていない、という意。

〔原文〕「吾が儕は儉食して、朝に夕べを謀らず。何ぞそれ長きをせんや〔私どもは、ろくな仕事もせず、ただ俸禄をいただいており、朝は朝だけで夕刻のことは考えていません。どうして長い先のことを考えるでしょう〕」

朝に夕べを慮られず — 李密・陳情の表 —
あしたゆうべ　はか　りみつちんじやうりやう

朝には夕方にどうなるか考えることができない。いつどんな変化が起こるかかわからず、生命が旦夕に迫っていることをいう。

〔原文〕「人命は危浅にして、朝に夕べを慮られず〔人の命ははなはだ危うくはかないものであるから、朝には、夕方にどうなるか予想がつかない〕」

明日は明日の風が吹く
あしたあした　かぜ　ふ

明日は、今日の風とは違った明日の風が吹く。明日には明日の運命があるから将来のことは気にしないで、現在を十分楽しむほうがよい、という意。

朝あしたゆう夕ゆうべに及およばず——左伝・襄公十六年

朝に夕方まで待っていられない。事がらが非常に切迫した状態をいう。

原文「敵邑ていよくの急なる、朝あした、夕ゆうべに及およばず。領りやうを引ひきて西望せいぼうして曰いはく、庶幾しかからんか、と「我が国の切迫している状態というものは、朝に夕方までの時間を待てないほどで、人々は首すじを伸ばして西の方を望み、今にも（晋国の援軍が）やって来るであらうか、と言っております」

足下あしもとから鳥とりが立たつ

突然、身近なところに意外な事件が起こるとえ。また、急に思いついたように物事を始めるたとえにもいう。いろはがるた（京都）の一。

足下あしもとに火ひがつく

危険や災難が身に迫るとえ。

用例 閣僚が汚職事件に連座し、内閣の足下に火がついてしまった。

足下あしもとを見みられる

弱点を見抜かれてつけ込まれる。弱みをにぎられる。「足下を見る」とも使う。

用例 住宅難の折から、足下を見られて高い権利金をふっかけられた。

足あしを知らずして履くつを為つくる——孟子・告子上

同じ種類のものは性質も共通する意。人の足の大きさには大差がないから、いちいち足の大きさを知らなくとも、靴くつを造ることができる。

原文「童子りやうし曰いはく、足を知らずして履くつを為つくるも、我われその糞き（もっこ）と為ならざるを知る、と。履くつの相似あひにたるは、天下の足同じければなり「童子が言った、足の大きさを知らずに靴を造っても、もっこのような大きなものにはなら

ないことがわかる。人の足の大きさは大体似たようなものだから」

あす 明日ありと思う心の仇桜 — **おもしろ 親鸞上人絵詞伝**

桜は明日もまだ美しく咲いているだろうと安心して、その夜中に強い風が吹いて散ってしまうかもしれない。人生もそれと同じで、明日はどうなるかわからないから、頼みにしてはいけない、という世の無常を説いた戒め。

【参考】 下の句は「夜半に嵐の吹かぬものかは」。親鸞上人の作といわれる和歌。

あすかがわ ふちせ 飛鳥川の淵瀬

飛鳥川(奈良県の中部を流れて、大和川に合流する小さな川)は、水流の変化がはなはだしく、そのため深いところ(淵)と、浅いところ(瀬)とが変わりやすいことから、世の中や人事が絶えず移り変わって、無常なさまをいう。

【参考】『古今集』雑下の「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬になる」という歌に基づく。

あすし 明日知らぬ身

明日はどうなるかわからない無常のからだ。

あす 明日のことは明日案じよ

この世の中のことは予想通りにならないのが常であるから、明日のことは今日あれこれと考えるより、明日になってから心配せよ。将来のことを考えるよりは、現在をより充実させることが大切である、という意。

あす ひやく きよう 明日の百より今日の五十

明日になればくれるという百文の銭より、今日くれる五十文のほうがありがたい。わずかでも、さし迫っている今、もらうほうがよい。また、明日はどうなるかわからないから、わずかでも、今、確実に手に入るほうがよい。

ということ。

あたえ
与えるは受けるより幸いなり

人から恩恵を受ける境遇にあるよりは、人に恩恵を与えることのできる境遇にいらっしゃる方が幸福である。

〔原文〕 It is more blessed to give than to receive. の訳語。

あたえ
当たって砕ける

成功するかしないかわからないが、とにかく思い切つてやってみる。そうして失敗するならそれでもよい。

あたえ
寇に兵を藉し盗に糧を齎す — 〔戦国策・秦策〕

敵に武器を供給したり、盗賊に食糧を持って行ったりしてやる。敵側に利益になるように図ること。利敵行為。転じて、悪人が悪事を行うのに都合のよい口実を与えてやる意にも使われる。

〔原文〕 「今乃ち黔首を棄て以て敵国に資し、賓客を却けて

以て諸侯を業け、天下の士をして退きて敢て西に向かわず、足を裏んで秦に入らざらしむ。これ所謂寇に兵を藉して盗に糧を齎す者なり（今や人民を見捨てて敵国に行かせて敵国を利し、賓客を退けて秦に入れず、諸侯の国に行かせて諸侯を助けさせ、天下の士を西に向かわせず、足をとどめて、秦に入らないようにさせていますのは、これは、いわゆる、敵に武器を貸し、盗賊に食糧をくれてやって、その力を強くしてやるものであります）」

〔参考〕 これは、秦で他国出身者を放逐する法令を出そうとした時、楚国出身の李斯が、それは優秀な人材を敵国に行かせる利敵行為になるといつて反対した時の言葉。

あたえ
徒花に実は成らぬ

雄花に実は成らない。着実性を欠く計画は成功しない。見掛けがよくても真の値打ちのないものは、立派な成果を上げることとはできない、という意。

頭あたま隠かくして尻しり隠かくさず

悪事や欠点を、自分では完全に隠したつもりでいても、その一部分が現れているのを知らないでいる。雉きじは、首を草むらの中に隠しさえすれば、尾が丸見えでも平気でいることからいう。いろはがるた(江戸)の一。

頭あたまの上うへの蟻はえも追おわれぬ

自分一身の始末もできないことをいう。

頭あたまの黒くろい鼠ねずみ

家の中の物をかすめ取る者をいう。人間の頭髮の黒いのを鼠になぞらえて言った語。

新あたらしい酒さけは新あたらしい革袋かわふくろに

新しい考えや新しい内容は、新しい形式で表現することが必要であるという意。「新しい酒」は、キリストの教

え。「新しい革袋」は、腐敗した心を聖霊によつて一新された信者の心。新約聖書にある言葉。

中あたらずと雖いえども遠とおからず — 大だい学がく —

的中していないとはいへ、大した違いはない。ほぼ推測通りである。

〔原文〕「心誠こころまことに之これを求もとむれば、中あたらずと雖いえども遠とおからず〔何事でも心から真剣に求めれば、たとい的中しなくとも遠くはずれることはない〕」

当あたるも八卦はつけ当あたらぬも八卦はつけ

占いは当たる場合もあるし、当たらない場合もある。その当たり外れを必ずしも気にする必要はない、ということ。ためしに試みてみよ、という意にも使われる。

彼方あちら立てれば此方こちらが立たたぬ

一方をよいようにすれば他方には悪く、両方同時によい